第21回　大学教育研究フォーラム
小講演（於：京都大学）
2015年3月13日

神戸大学

論理的思考を養う
アカデミック・ライティングのあり方

近田 政博
神戸大学　大学教育推進機構／大学院国際協力研究科

自己紹介

- 神戸大学　大学教育推進機構に所属
  - 教育本部組織のスタッフ
  - 同大学 大学院国際協力研究科を兼担
- 2014年3月末まで名古屋大学に勤務
  - 高等教育研究センターでFD・SDプログラムや教材を開発
  - 大学院教育発達科学研究科　高等教育学講座
- 主な著書（高等教育系）
  - 『成長するティップス先生－授業デザインのための秘訣集』（2001年、共著）
  - 『学びのティップス　大学で鍛える思考法』（2009年、単著）
  - 『大学教員準備講座』（2010年、共著）
  - 『名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック』（2011年、共著）

この小講演のメニュー

- １．はじめに：日本の大学におけるアカデミック・ライティング(AL)実践・研究の動向
- ２．大学生にとってのAL
- ３．授業担当者にとってのAL
- ４．まとめ

アカデミック・ライティングとの関わり

研究者ではなく実践家

- 名古屋大学での取組み
  - 学生論文コンテスト
    - 平成19年度～25年度
  - 附属図書館での「レポート書き方講座」および「TAのためのライティング支援セミナー」
    - 平成23～25年度
  - 文系基礎科目「学術論文の書き方入門」
    - 平成24～25年度
- 神戸大学での取組み
  - 附属図書館研究開発室員として図書館の学習支援戦略について検討中（平成26年度～）

アカデミック・ライティング（学術的な文章を書くこと）とは何ぞや？

- 「問い」と「答え」の構造と、論理的な説明（妥当な論証）で構成されている
- 説明の根拠となる情報が明示されている
- 説明文がパラグラフ構造になっている
- 引用など学術的な倫理のルールに従っている
- 学術的文章に特有の一定の形式（書式）に従っている
  - 堀一成・坂尻彰宏, 2015, p.2

1．日本の大学におけるアカデミックライティングの動向

- 大学ごとのオリジナル教材が増えている
- 学士課程全体、大人数を射程に
  - 早稲田大学のライティング・センター(2004年）
    - オンデマンド型のライティング授業「学術的文章の作成」
  - 大阪大学全学教育推進センター
    - 『阪大生のためのアカデミック・ライティング入門』 2014年
- 文章作法だけでなく、全体の論理構成を重視
  - 戸田山和久『論文の教室』NHKブックス、2002年など
- 大学だけでなく、高校にも普及しつつある
  - 国際基督教大学高校ライティングセンター
  - 名古屋大学教育学部附属高校国語科
    - 『はじめよう、ロジカルライティング』ひつじ書房　2014年

2. 大学生にとってのAL

- 学術的な文章、論理的な文章を書けるようになることがなぜ大事なのか？
- 現代社会における「学識ある市民」をめざす上で、大学生が論理的な文章を書けるようになることにどんな意味があるのだろう？
  - 大多数の大学生は学者になるわけではない
  - このことを大学は学生に説明してきたか？

- 「人を動かし、組織を動かし、社会を動かそうと思うなら、いい文章が書けなければならない。いい文章とは、名文ということではない。うまい文章でなくてもよいが、達意の文章でなければならない。文章を書くということは、何かを伝えたいということである。**自分が伝えたいことが、その文章を読む人に伝わらなければ何もならない。**」
  - 立花隆ほか『二十歳のころ』新曜社、1998, p.15

- **「子曰、辭達而已矣」（辞は達するのみ）**
  - 論語

学術論文は取扱説明書に近い？

	日記	小説	取扱説明書
対象	自分	不特定多数 その小説を読みたい人	不特定多数 その装置を使いたい人
制約条件	なし	なし	あり（機能説明）
目的	自己満足、記録	読者の満足	操作方法をできるだけ早く理解すること
解釈	意識せず	多様な解釈が可能	一通りの解釈のみ可

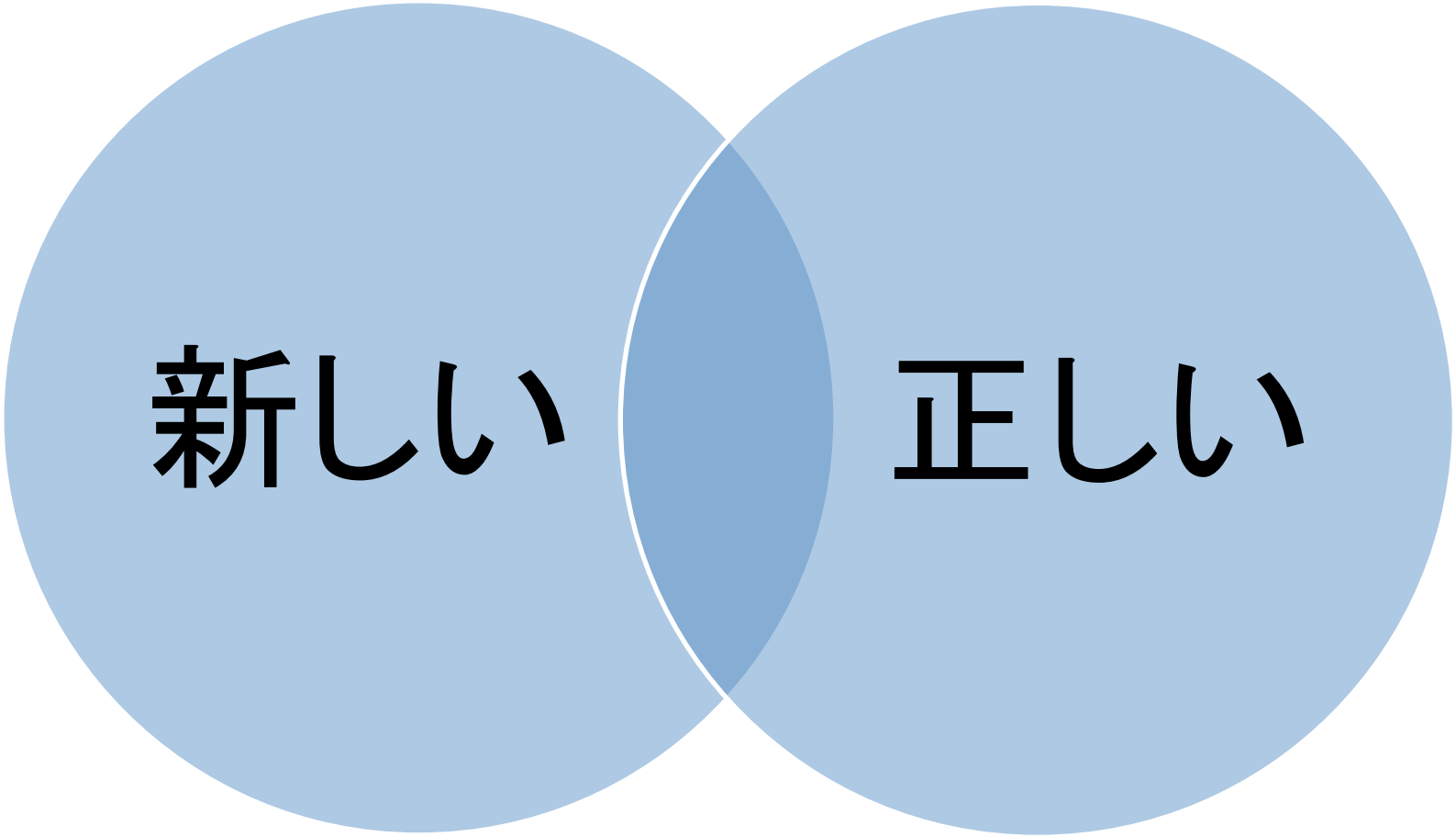
だから、論文を書くスキルは社会に出てからも有用だと言えるか？

文章を構造化する上で必要な要素
（渡辺哲司, 2013)

- 提起する＜問い＞
- 問いに対する＜答え＞
- 答の＜根拠＞
  - “論ずる”とは「＜問い＞を起こし、それに対して＜根拠＞をともなった＜答え＞を示すこと」（渡辺, 40頁）

「科学とは、新しくて正しいことを言う営み」

（戸田山和久, 2011年, 104-105頁）



→だから論文を書くのは難しい！

型破りと型無し
（無着成恭、中村勘三郎）

論文の基本型

- 研究目的、意義、仮説提示
- 先行研究の整理
- 研究方法論、理論枠組み、方法
- 実験、調査などの結果
- 結果の考察、仮説検証
- 結論、残された課題
- 参考文献

学生はなぜ書けないのだろう？

- 学校作文から抜け出せない
- 大学教員が「論じよ」という意味がわからない
- 書くこと（あるいは表現すること全般）に対して、過剰なほどの苦手意識がある（渡辺哲司, 2013）

学校作文の伝統

- 思いつくことをありのままに綴る
- 小学校で作文経験を積むが、中学校や高校ではあまり経験を積むことがない
- 子どもの個性や感性を尊重
  - 学校作文の例：今日は遠足で動物園に行きました。象さんが鼻を上手に使ってリンゴを食べていました。象さんの鼻は本当に長いなあと驚きました。すごいなあと思いました。
  - 大学だと：象の鼻はなぜ長く発達したのだろうか。私は次のように推測する。この仮説を確かめるために次のような方法を用いる。その結果、仮説通りにはならなかったので、たぶん別の理由があるのだろう。

「論じよ」という意味がわからない

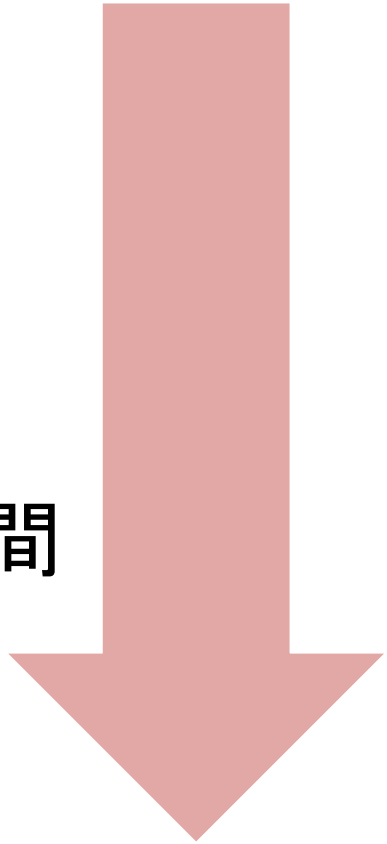
- 「最近の学生をよくわかっていない教師が昔ながらの“大学らしい”流儀で気軽にレポート課題を出すところからはじまる」（渡辺,25頁）
  - 入学したばかりの学生に過大な問題意識や論理構成を求めるのは現実的でない
  - 新入生は自由に論じたり、提案することに慣れていない

過剰なほどの苦手意識
（渡辺, 2013）

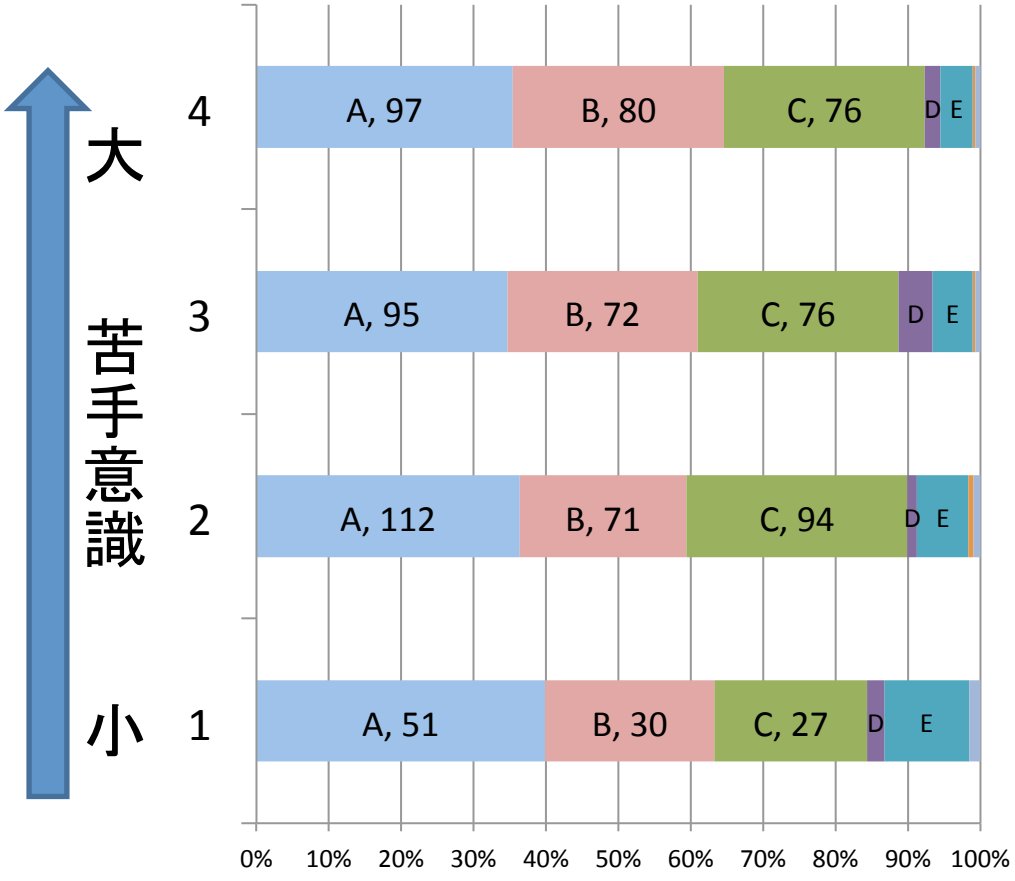
- 文章を書くことに対する自己評価は、他者評価に比べてかなり低い
- 苦手意識の大きな学生は、書き始めてから苦労する傾向が強い
- 「自分の意見を他者に向けて表明することを抑制するような心のはたらき」（渡辺, 101頁）
- 大学生には、まとまった文章を書いてきた経験値がぜんぜん足りない
- →この苦手意識は文章作成だけか？
- 　もしかして学び全般にも当てはまるのでは？

文章を書く際に最も苦労する段階

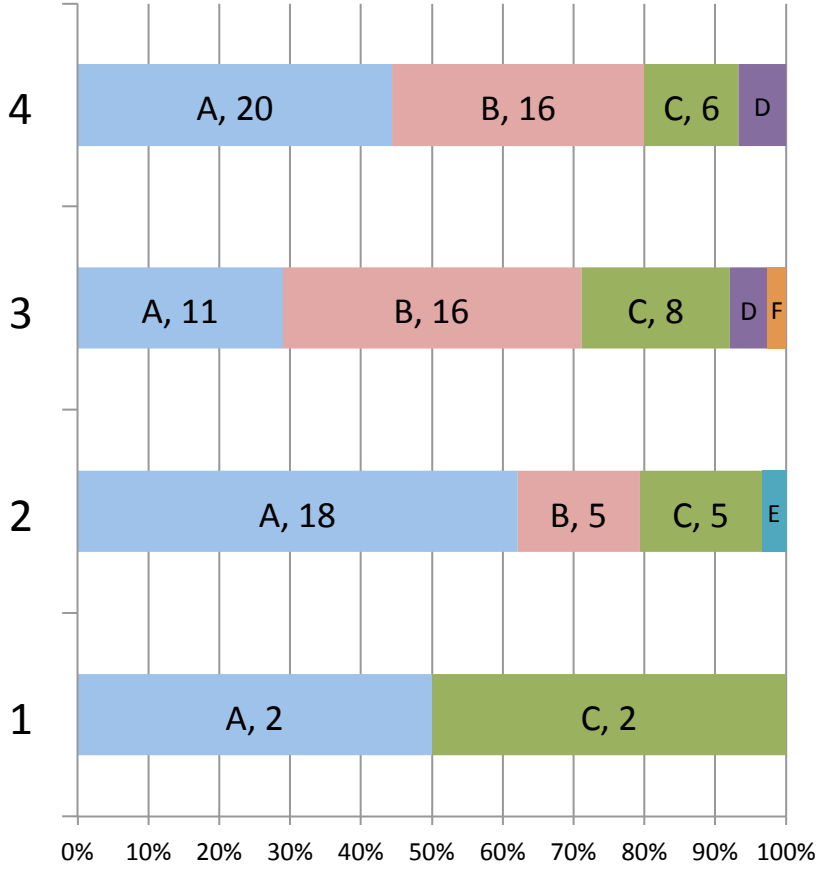
- A. 書き始める前
- B. 書き始める時
- C. 書き始めた後
- D. ひととおり書き上げた時
- E. 書き上げてから提出するまでの間
- F. 提出する時
- G. 提出した後



文章を書く際の苦手意識の大きい人は、どの段階で苦労しているか？



渡辺・島田調査（N=984)



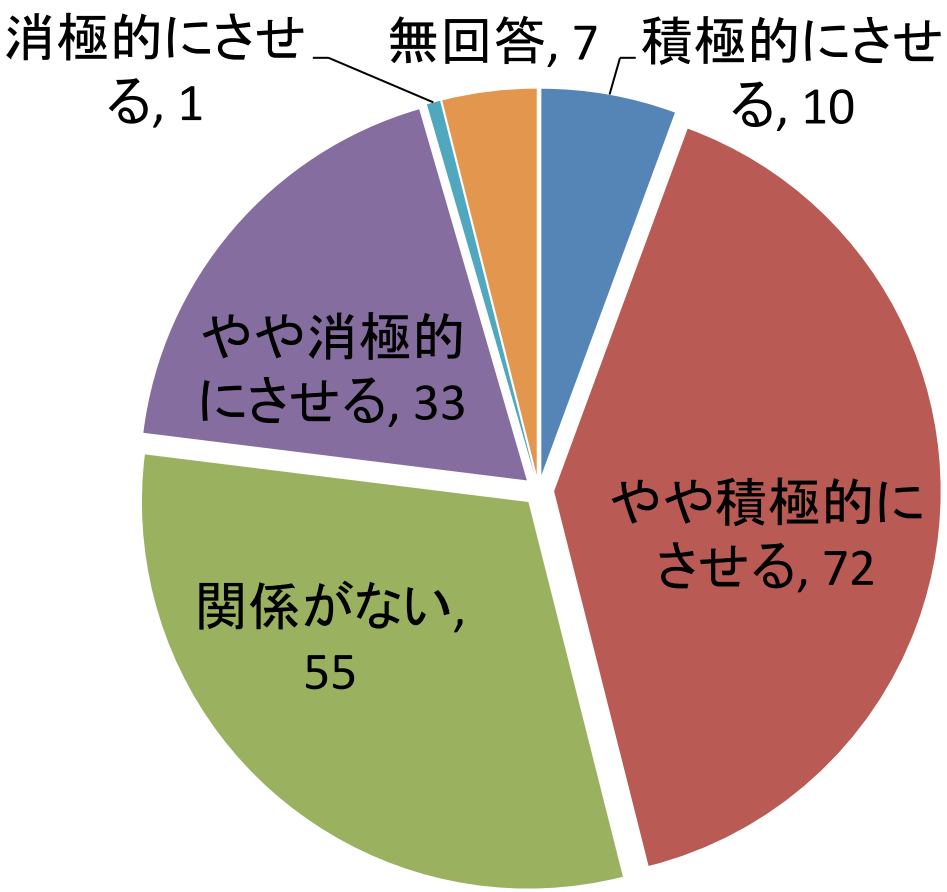
近田調査（N=116)

大学生はアクティブラーニング型授業をどう認識しているか

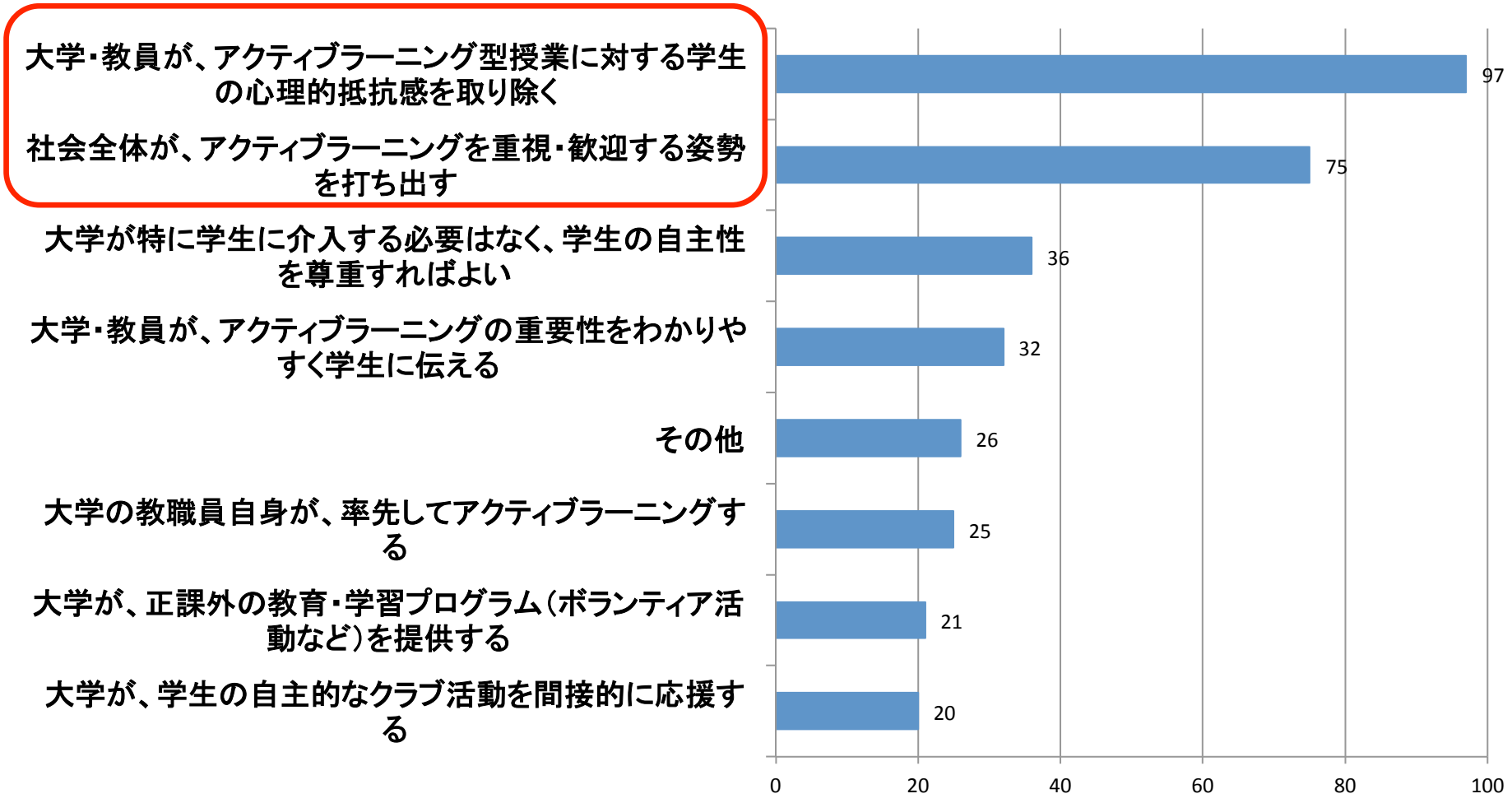
神戸大学でのミニ学生調査

- 2014年12月実施
- 全学共通教育＞教養原論＞「教育と人間形成」の履修者178人（2コマ分）
- 学年：
  - 1年107人、2年62人、3年4人、4年4人、不明1人
- 学部：
  - 医51人、農39人、理28人、経済15人、法14人、経営13人、発達科学10人、国際文化4人、文2人、工1人、不明1人
- 入試形態：
  - 前期日程131人、後期日程29人、AO入試6人、推薦入試8人、社会人入試1人、その他2人、不明1人

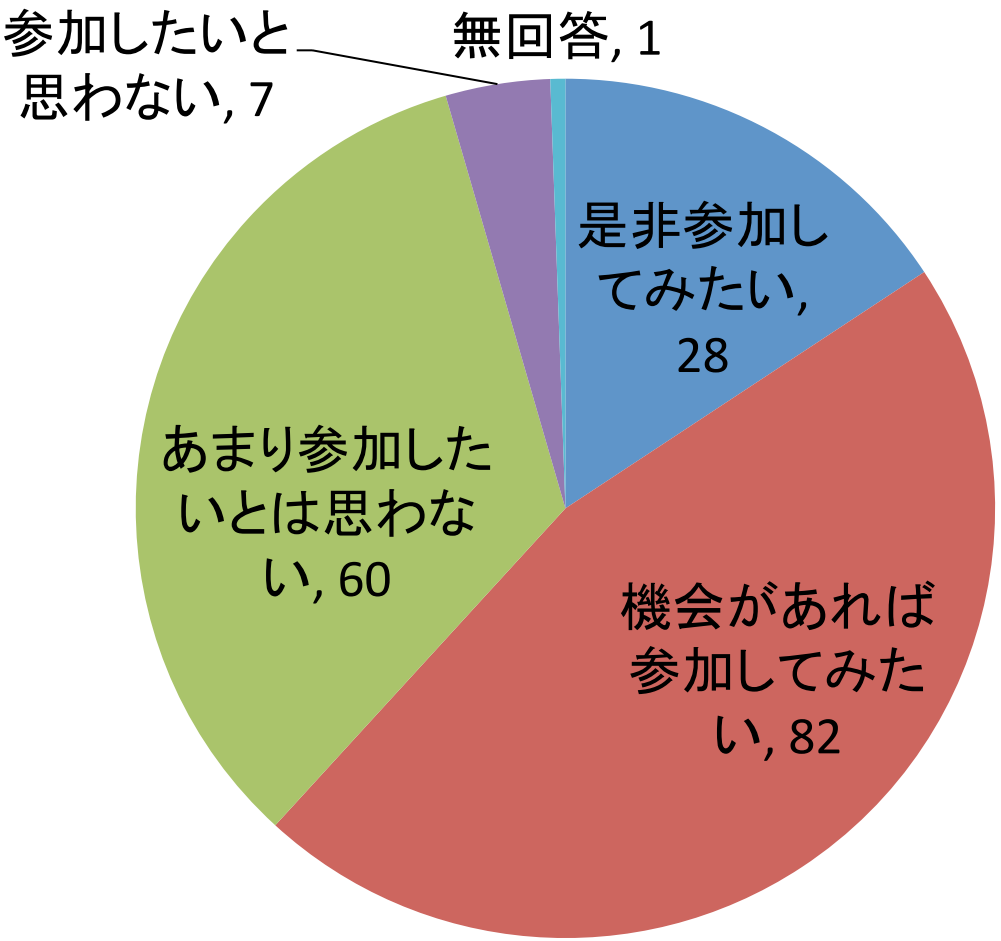
アクティブラーニング型授業が学生の学びに与える影響（N=178）



大学生の主体的な学習を促進する上で有効な方法（複数回答）



アクティブラーニング型授業に参加したいか（N=178）



なぜアクティブラーニング型授業に参加したいとは思わないのか？

自由記述意見をコーディング

	件数
苦手、人見知り、恥ずかしい	19
負担感、疲れる、面倒くさい、意欲不足、興味なし	16
抵抗感、嫌悪感	11
効果を期待できない	6
従来型の授業スタイルを支持	6
アクティブラーニングの知識・能力不足	5

全体的な特徴

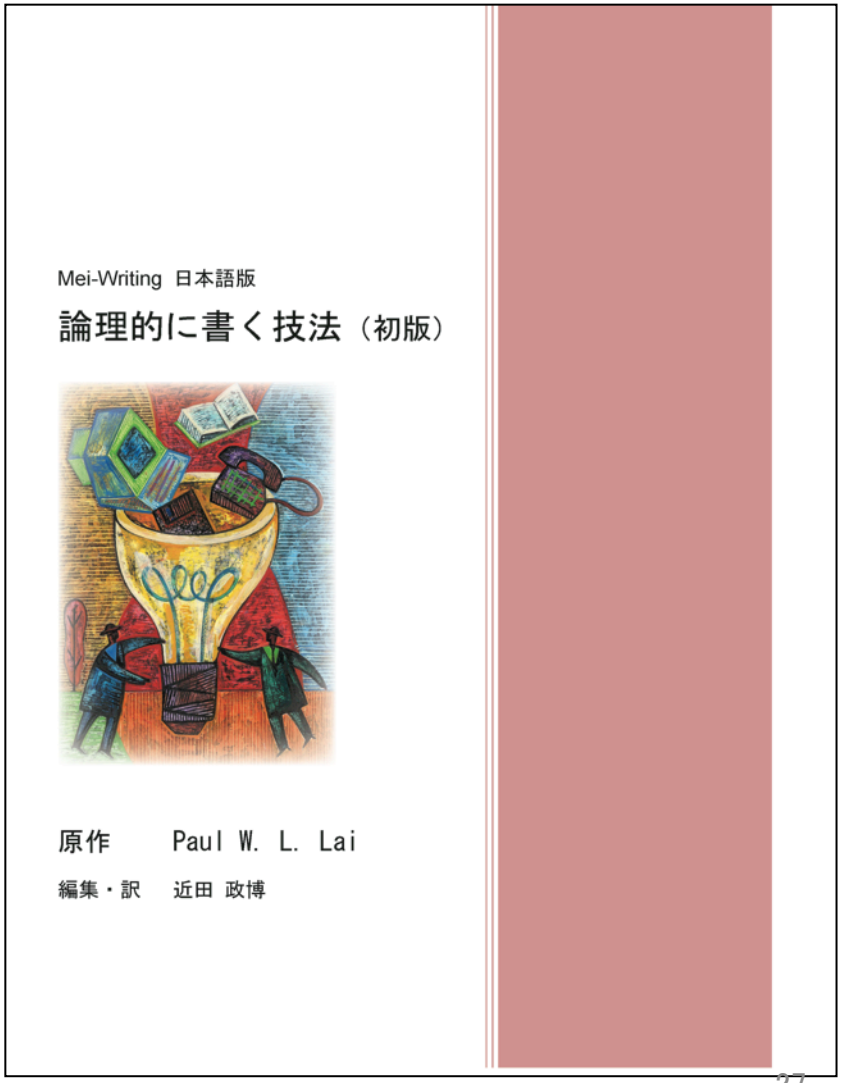
- 学生はアクティブラーニング型授業の効用をそれほど楽観視していない
- （一定の基礎学力があっても）アクティブラーニングが苦手な学生は少なくない
- 対人コミュニケーションにおける学生の羞恥心、気後れ感、グズグズしてしまう気持ちは無視できないほど大きい
- アクティブラーニング型授業への苦手意識と、書くことへの苦手意識はシンクロするのではないか？

3．授業担当者にとってのAL

- 論理的な文章の基本を知らない、かつ苦手意識の大きな大学生が書けるようになるには、大学としていかに支援すればよいか？
- 教員やTAのためのガイドラインもある
  - 堀一成・坂尻彰宏「阪大生のためのアカデミック・ライティング入門」ライティング指導教員マニュアル、2015年（ウェブ公開）
  - 近田政博「学生に的確なレポートを書かせる」 名古屋大学高等教育研究センター　ファカルティガイド、2010年（ウェブ公開）

授業「学術論文の書き方入門」の実践

- 平成24～25年度名古屋大学の全学教育科目（文系基礎科目）として開講
- 文系学生約100名／年
- オリジナル教材（右図）
- ウェイ・リン・ライ氏のAL授業メソッドに基づく
- 5種類のワークシート、SNSの活用



５種類のワークシート

- １．論文主題(thesis statement)を作成する
- ２．論証方法(logical argument)を提示する
- ３．論文要旨を作成する
- ４．序論を作成する
- ５．論証に必要な先行研究を整理する

授業の効果測定

（近田, 2013）

- 文章を書き始める前後で苦労度が軽減した学生が3～4割みられた
- 苦労度がむしろ増加したと考える学生も1割程度みられた。どういうこっちゃ？
- 受講者は、グループワークよりも教科書やワークシートから大きな影響を受けている
  - 自分の書いたワークシートを他の学生に見られるのが好きでない学生も多い
- 一定の効果はあったと思うが、受講者100人では大海の一滴に等しい

「TAのためのライティング支援セミナー」

- 授業でどのようなレポートを求めているかをていねいに説明する
- 大学で求められる文章のルールやマナーの基本を伝える
- いきなりレポートを提出させずに、授業中に準備させる
- 提出前に最終確認させる
- 採点結果を早めにフィードバックする

＊大学院生にとっても論文の書き方を復習する機会になる

例：提出する前に最終確認させる

- 書いたレポートを学生に読み返させる
- 与えられた題目に対して適切な記述になっており、論旨が明確になっているか
- 誤字、脱字、表記ゆれ
- 定められた分量を満たしているか
- 参考文献が適切に記載されているか
- 原稿やファイルのバックアップをとったか
- 提出が遅れた場合の対応方法（受け取るのかどうか、減点になるのかどうか、提出先）

例：フィードバックの方法

- 模範解答をあらかじめ用意して、課題の提出直後に学生に示す
- レポート提出締切りを授業終了の少し前に設定し、最終回までに採点結果をフィードバックする
- レポート課題を回収した次回の授業で、優れているレポート事例を挙げて、その理由を説明する。あるいは犯しやすい失敗例を紹介する。
- 優れたレポート事例を匿名にして授業のウェブサイトにアップする（事前に該当する学生の了解を得ておく必要あり）。
- 返却した課題を学生間で回覧させ、相互に改善方法をコメントさせる

問題は大学生だけではない！
大学院生も深刻

大学教員は大学院生への研究指導においてどのような課題や悩みを抱えているか？

2008年3月～5月に国立N大学の教員15人に対して聞き取り調査を実施

- 「論文を書くための基礎的な国語力が不足している学生がいる」（多元数理科学）
- 「文献レビューは書けるが、自分の文章を書けない院生がいる」（経済学）
- 「文章を作成することが苦手な学生が多い。独りよがりで、読み手を意識しない文章、話し言葉が多い」（教育発達科学）
- 「日本語の文章をほとんど書けない学生がいる」（生命農学）
- 「論文の書き方を教えるのに時間を要する」（環境学）

専門分野を問わず、論文の基本的な書き方をマスターできていない大学院生が続出

- 大学院重点化で研究大学の院生が大幅に増えたため、教員は学士課程教育の充実になかなか手が回らない
- 多様な背景をもつ大学院生（他大学出身者、外国人留学生、社会人学生等）が増えたので、基本スキルが十分に担保できていない
- 学生は専門分野のコンテンツにとらわれて、相手にどう伝えるかにあまり注意を払わない

学生が論理的な文章を書けるようになることは教員にとってどんなメリットがあるか？

- レポートや論文を読む作業が格段に楽になる
  - 時間の節約になる
  - ストレス軽減
- 内容本位で評価できる
- 安定的な学位授与につながる

アクティブラーニングがめざすもの
溝上(2015)

- アクティブラーニングの基本は、獲得した知識をいかに伝えるかということ
- 知識の習得と活用はセットにして学ぶのが世界の主流となっている
- 高校までの学校がアクティブラーニングを積極的にやるようになっているのに、大学がそのままでは接続がうまくいかなくなるでは？
- 学生の自主性だけに頼っていて、果たして学生は社会に適応できるようになるのか

4. まとめ
試行錯誤を通して思うこと

- 学士課程段階のすべての学生が、基礎的な「書く力」を習得できるようにすることは、大学教育の質保証にとって不可欠。
  - 個々の授業では限界。大学全体で取り組むべき
- 自己表現に関する学生の苦手意識は、アカデミック・ライティングにも影響するのではないか
  - 基礎学力と苦手意識は必ずしも一致しない
- 学生が論理的な文章を書けるようになることは、教員にとってもメリットがある

参考文献

- 佐渡島紗織・吉野亜矢子(2008)『これから研究を書くひとのためのガイドブック』ひつじ書房
- 近田政博(2009)「大学院の研究指導方法に関する課題と改善策－名古屋大学教員に対する面接調査結果より－」『名古屋高等教育研究』第13号, 93-111頁
- 近田政博(2013)「『学術論文の書き方入門』の授業実践－文章作成に対する学生の苦手意識は軽減できるか－」『名古屋高等教育研究』第13号, 103-122頁
- 近田政博(2015)「アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識－神戸大学での調査結果から－」神戸大学大学教育推進機構『大学教育研究』第23号, 1-17頁（印刷中）
- 戸田山和久（2011）『「科学的思考」のレッスン　学校で教えてくれないサイエンス』NHK出版新書
- 戸田山和久(2002)『論文の教室　レポートから卒論まで』NHKブックス

参考文献（つづき）

- 堀一成・坂尻彰宏(2015)『「阪大生のためのアカデミック・ライティング入門」ライティング指導教員マニュアル』大阪大学全学教育推進機構
- 堀一成・坂尻彰宏(2014)『阪大生のためのアカデミック・ライティング入門』大阪大学全学教育推進センター

  http://www.celas.osaka-u.ac.jp/ourwork/academic_writing

  （2015年3月12日検索）
- 溝上慎一(2015)「なぜアクティブラーニングか　アクティブラーニングを通して何を目指すのか」神戸大学大学教育推進機構FD講演会配付資料、2015年3月5日
- 渡辺哲司(2013)『大学への文章学　コミュニケーション手段としてのレポート・小論文』学術出版会